

## 第二章 源頼朝の挙兵と真鶴

### 第一節 源頼朝と豆相の武士たち

#### 源 頼 朝

頼朝は一一四七年（久安三）に源義朝の三男として生まれた。母は尾張国（愛知県）の熱田神宮の大宮司藤原季範の娘である。乳母として養育にあたった人々には、下野の武士小山政光の妻、武蔵国比企郡の郡司で武士の比企掃部允の妻（比企尼）、京都の官人三善康信の伯母などがおり、京都で成長した。父の威光や母方の縁により、二人の兄より官位が進み、一三歳の時おこった平治の乱には義朝の嫡男の資格で初陣し、従五位下、右兵衛権佐になった。しかし、敗北し捕らえられた頼朝は官位を剥奪され、伊豆に流罪となった。

鎌倉時代に幕府が編纂した幕府の歴史書『吾妻鏡』には頼朝のことを「前右兵衛佐」とか、「武衛」と記している。武衛とは兵衛府という、天皇の警護などにあたった役所の中国風の呼び名である。頼朝は左・右二つある兵衛府のうち、右兵衛府の佐（次官）に、定員外で権に任命されたのであった。また、『平家物語』は頼朝を「佐殿」と記している。ほんの一次的に任命されただけの官職名が流人頼朝の勲賞となり、地方の武士に優越する存在であることを印象づける効力をもった。

さて、一一六〇年（永暦元）に伊豆に入った頼朝は、三島にある国衙の役人や平家ゆかりの武士たちの監視のもと、一四歳から三四歳まで二〇年間の流人生活を送ることになった。その間、父母・一族の菩提をとむらって読経に励む一方、伊豆・相模の武士たちや箱根権現・伊豆山（走湯山）権現との結びつきを作ることを忘れなかった。たとえば『吾妻鏡』に、石橋山の合戦で念珠を紛失した頼朝が、その念珠が頼朝のものであることを、それまでいっしょに狩りをしたことのある相模国の多くの武士が見知っているはずだとして、たいへんあわてた、という話が載っている。流人監視がゆるやかであったことを示すとともに、武士たちと日ごろ幅広い交流のあったことを物語る。平家全盛の世にあって、頼朝に将来の安泰が約束されているはずはなく、都にいたる乳母の甥三善康信を介して定期的に平家や中央政界の情勢を把握することにも努めた。孤高を保っているとは思えない道は開けなかったのである。

#### 伊東氏と北条氏

頼朝のいた伊豆国で有力な土着勢力をあげるとすれば、国衙の有力な官人である工藤介（狩野介）と、その一族の伊東、同じく官人とみられる北条の三氏であろう。頼朝は配所にも近いこの三氏と親密な関係を結ぶ必要があった。

『曾我物語』や『源平盛衰記』には、頼朝が伊東祐親の娘と恋におち、男子千鶴丸をもうけたが、祐親が怒って千鶴丸を殺したうえ、娘と頼朝の仲を裂いた話が載っている。この話が史実かどうかはわからないが、当時祐親は伊豆東海岸の伊東荘を中心にその北の宇佐美荘、南の河津荘などを領しており、頼朝はその力に頼ろうとしたにちがいない。しかし、祐親はそれを拒否して平家への忠心を貫き、頼朝挙兵でも敵方として石橋山に戦うのである。

これと対照的なのは北条時政・政子の父子である。祐親に敵対された頼朝は、祐親に匹敵する力をもつ北条時

政を味方につけるため、時政の上洛中に政子と契を結び、反対を押し切って娘婿の地位を獲得してしまうのである。

工藤介や伊東氏は藤原氏の出、北条氏は平氏の出であるが、いずれも大番役などで京都に上り、平氏に忠勤を励んで自己の地位を固めようとしていた。とくに伊東祐親は所領問題で一族の工藤祐経と争っていた。そして子の祐通（祐泰、曾我兄弟の父）を祐経に殺されるまでに、対立は根深くなっていたが、平氏と強く結びつくことで祐経の権利を排除することに成功した。伊東祐親があくまで平氏方につく立場をとったのはこのためである。

平氏方の大将として石橋山で頼朝と戦った大庭景親は、保元・平治の乱のころは源義朝に従って戦っていたが、捕らえられて処刑されることを平氏に助けられた恩義によって忠勤を励むようになったといわれる。景親の先祖が相模の大庭御厨を開発していたとき、それを妨げて乱暴狼藉を働いたのは義朝配下の軍勢であり、一時的には義朝に従ったものの、平氏が政権をとると、これと結んで勢力伸張をはかり、この思惑が功を奏し、景親は南関東で屈指の勢力を誇るまでになった。

このように、伊豆や関東の武士たちの多くが平氏と密接な関係を取り結んで、所領の保全や勢力伸張をはかっており、官位も領地も武力も持たない頼朝に背を向けるのはけだし当然の成りゆきであった。伊東祐親の対応こそ世の主流だったのである。頼朝が挙兵への参加を要請したとき、頼朝の次兄朝長の母の実家の波多野氏（秦野市）も、頼朝の四代前の八幡太郎義家の妻の実家である山内首藤氏（鎌倉市）も、要請に応じようとしなかった。そうしたなかで、わずかながらも頼朝に心を寄せ、頼朝をもりたてることによって将来を切り開こうとする人がいた。土肥実平をはじめとする中村氏一族や北条氏、三浦氏などである。

実平と豆相  
の武士たち

実平は挙兵の前から頼朝の厚い信頼を得た武士の一人であった。なぜ実平が一介の流人に心を寄せたのか、本当のところはわからない。父の中村莊司宗平が義朝の軍勢に加わって大庭御厨に押し入ったことはすでに述べたが、父の代から中村一族が義朝と密接な結びつきをもっていたことも一つの要因であろう。また、右に述べてきたような点を考えると、平氏全盛期の潮流に乗りそこね、かえって大庭氏らの勢力伸張に危機感をいだいていたのかもしれない。

実平とともに頼朝の信頼を得た武士に宇佐美三郎祐茂がいる。伊東祐親に圧迫され対抗していた工藤祐経の弟である。土地の開発を進め、所領を拡大しようとしていた武士たちの間に生じた激しい対立が、一部の武士を平氏打倒と頼朝擁立に向かわせる背景になっているのである。

土着の武士が自分の家や一族の安泰と発展をはかる道は、平氏など中央政界の勢力と結ぶことのほかに、近隣の武士との間で婚姻関係を持つことであった。実平は嫡子遠平の妻に伊東祐親の娘を迎えている。また、実平は祐親の子祐通の烏帽子親えぼしおやとなっており、実平が自領の南隣に大勢力を張る伊東氏と親密な関係を保とうとしていたことがうかがえる。

伊東氏の場合、祐親の娘は、遠平のほか、相模三浦半島の三浦義澄や伊豆の江馬次郎に嫁ぎ、また北条時政と結婚した娘もいるといわれる。孫娘は相模の波多野能常に嫁いでいる。祐親の妻は三浦義澄の姉か妹であり、長子祐通の妻には工藤介茂光の孫娘を迎えている。この孫娘が祐通に嫁ぐ前に伊豆の目代左衛門尉ななしげ仲成との間にもうけた娘は、実平の甥にあたる二宮朝忠の妻となっている。祐親の第二子の祐長（祐清）の妻は頼朝の乳母比企尼の娘である。

このように武士たちは婚姻関係を縦横にめぐらして、勢力伸張に利用したのである。もとより、頼朝の挙兵に



際し、伊東氏と土肥氏が互いに敵として相戦ったように、血縁関係だけで去就が決まったわけではない。親子が相戦うこともめずらしいことではなかった。しかし、たとえば伊東祐親のちに頼朝に捕らえられたとき、娘婿の三浦義澄が祐親の助命を嘆願して認められているように、やはり強いきずなをつくりだしたのである。

それとともに、武家の重要な儀式であった元服の儀式で、成人のしるしとなる烏帽子をつける役目を演じる烏帽子親と元服した烏帽子子との間にも、一種の「親子」関係を示す興味深い話がある。『曾我物語』の中に実平と伊東祐親の長子祐通との「親子」関係を示す興味深い話がある。

ある年の紅葉のころ伊豆の原野で伊豆・駿河・相模・武蔵四か国の武士が巻狩を催し、最後の日の酒宴の場で相撲が行なわれたときのことである。次々と挑戦を退けて勝ち名乗りをあげた俣野五郎景久（大庭景親の弟）は、つづく挑戦者もはやなしと見て、実平に「年寄にても御渡り候へ」と挑発した。実平は内心腹が立ったが、笑って応じなかった。景久はいよいよ勝ちほこった。このとき烏帽子親の実平の屈辱をそそがんと、挑戦の名乗りをあげたのが祐通であった。そして祐通は二度、俣野景久を投げ倒してしまふ。恥をかけた景久は武器を手にとり襲いかかろうとした。すると同席の武士たちも二手に分かれて、いまにも戦争がはじまろうという緊迫した情勢になった。これをいさめ、無事におさめたのが実平と景久の兄大庭景能であったという。実平の人柄を示すエピソードと見ることもできよう。

## 第二節 石橋山の合戦

### 挙兵の決意

平氏が高位高官を独占し、後白河法皇を鳥羽殿に幽閉するなどの横暴が極に達したとき、まず都で平氏討滅の企てが生まれた。頼朝と同じ清和源氏の源頼政は、後白河法皇の子以仁王もろひとながとはかって挙兵を企て、一一八〇年（治承四）四月九日夜、ひそかに令旨みづかみを発して、全国の源氏に決起を呼びかけた。しかし二人の企てはやがて平氏に察知され、五月下旬二人は敗死してしまう。これを機に平氏は諸国の源氏の追及にのり出すことになる。

令旨は、頼朝の叔父源行家によって四月二七日に北条館の頼朝に届けられた。行家はすぐに甲斐・信濃の源氏にも令旨を届けるべく出立した。頼朝は水干の装束に改め、京の男山八幡宮を遙拝した後に令旨を披ひらき見たというから、これを機としてひそかに挙兵を決意したのであろう。そして六月一九日、京から三善康信の弟がやってきて、京の情勢を伝え、危険が迫っているから早く奥州へのがれるよう促した。一刻の猶予もなくなった頼朝は、源氏累代の家人（従者）に決起を働きかけるべく、安達藤九郎盛長・小中太光家こちゅうこうけを使者として派遣した。

六月二七日、三浦義澄と千葉胤頼（下総、千葉県の武士）が、京都大番役からの帰途に頼朝を訪ねてきた。かれらは五月中旬に役を終えて帰ろうとしていたところ、頼政らが敗死することになる宇治の合戦がおこり、平氏に抑留されていたのであった。かれらはすでに平氏を見限っていたにちがいない。頼朝はかれらから京都の情勢をくわしく聞き、挙兵のための相談を重ねた。

七月一〇日、使者の安達盛長がもどってきた。盛長に対し、相模国内の武士はおおむね頼朝への忠節を表明し

たが、波多野義常と山内首藤経俊はさんさんの悪口を吐いたりして、応じようとはしなかったという。一方、八月二日ころには、大庭景親をはじめとする平氏方の勇士たちが、源頼政らを敗死させた戦勝気分酔って、意気揚揚と帰ってきた。かれらは源氏の追討を任務とし、またそれを志していた。こうして事態は切迫していった。

#### 実平ら参陣す

頼朝は挙兵にあたり、最初の攻撃先を平氏の一族で伊豆国の支配を任されていた目代の山木兼隆とし、八月一七日早朝決行と定めた。八月六日、信頼できる勇士を一人ひとり呼んで、計画をうちあげ、丁寧に言葉をつくして参陣を要請した。工藤介茂光・土肥次郎実平・岡崎四郎義実・宇佐美三郎助茂・天野藤内遠景・佐々木三郎盛綱・加藤次景廉らは、これに感激して忠節を誓った（『資料編』古代・中世No.5）。その後、岡崎義実とその子与一義忠は頼朝からとくに「恃思し食さるる」ところがあつて、実平とともに一七日以前には頼朝のもとに参るよう、特別に召集をうけている。義実は三浦義明の弟（義澄の叔父）で、実平の妹婿となり、相模の岡崎郷（平塚市・伊勢原市）を本拠とした。その子義忠は真田（平塚市）の領主として佐奈田（真田）与一と呼ばれていた。中村氏一族である。この三人が早くから頼朝のもとに出入りし、相当地に信頼を得ていたことがわかる。

中村一族としては、この三人のほかに実平の嫡子弥太郎遠平・土屋三郎宗遠・同次郎義清・同弥次郎忠光・中村太郎景平・同次郎盛平らも加わって、一七日の山木館襲撃を成功に導いた。この夜の大將は北条時政であったが、迎え討つ兼隆方の剛勇閼屋八郎が、「今夜の大將は北条、佐々木か、土肥、土屋か、加藤が党か」と呼ばわったと『源平盛衰記』が記している。当時の土肥・土屋の地位をうかがうことができる。堀や櫓を構えた兼隆の館は、三島神社の祭礼で家臣たちが出はらい手薄にもかかわらず守り厳重で、攻めあぐねるほどであったが、夜も明けるところになってようやく兼隆の首をとり、頼朝の前に差出すことができた。

## 伊豆山と頼朝

伊豆国の政務をとっていた山木兼隆を滅ぼしたことで、頼朝がそれにとってかわる地位を得たことになる。翌一九日、頼朝は蒲屋御厨かまやのみくりやを支配していた兼隆の親戚、史大夫しだいふともぢか知親を解任し、さ

らに伊豆山の訴願も処理した。この間、土肥と頼朝のいる北条とを往来する武士たちが伊豆山で乱暴狼藉をはた  
らいて困ると、衆徒らが訴えていたのである。頼朝は世の中が平和になったら、伊豆と相模で一か所ずつの荘園  
を寄進し、関東で権現の威光を輝かすことを約束して、衆徒をなだめた（『資料編』古代・中世No.6）。

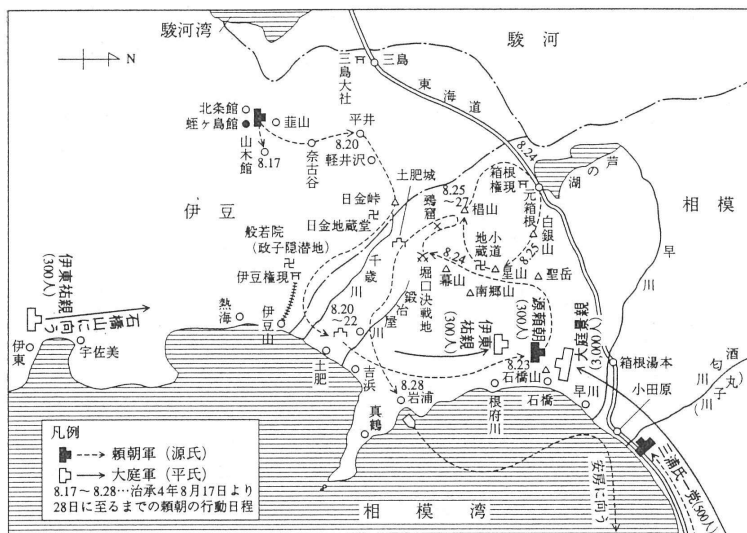
ひそかに頼朝のもとに赴く相模の武士たちが、真鶴町域を含む土肥郷を通じて、北条に通っていたのである。  
伊豆山権現は土肥郷のすぐ南、相模と北条を結ぶ通路をおさえるところにあった。それは頼朝が関東へ進出する  
関門にあったことを意味し、伊豆山の衆徒を味方につけなければ、挙兵は絶対に成功しえないのであった。これ  
はそのための措置であった。

もちろん頼朝はかなり早くから伊豆山と密接な結びつきを作っていた。政子が父の反対を押し切って頼朝と結  
婚しようとして駆けこんだところが伊豆山であり、頼朝もそこに迎えられ、思いをとげたといわれている。また  
頼朝は、挙兵にあたって伊豆山の文陽房覚淵を招いて相談をしている。頼朝は法華經一千部の読誦を念願して、  
それまでに八百部を終えていたが、あと二百部を残したままで挙兵にふみきらなければならなかったからであ  
る。覚淵は八百部読誦で十分であり、その加護でかならずや平清盛一族を退治できると頼朝を励まし感激させて  
いる。出陣にあたり、日課としていた般若心経などの読誦は伊豆山の法音という尼に頼んだ。この尼は政子の経  
師であった。そして政子は八月一九日夜、文陽房覚淵のもとに身を寄せた。伊豆山を完全に自分の側に抱きこん  
だといえる。頼朝はまた、伊豆と関東を結ぶもう一つの通路である箱根道をおさえる箱根権現とも密接な結びつ  
きをもっていた。それは石橋山敗戦のところで効力を発揮することになる。

頼朝は、三浦半島に大勢力をも

つ三浦義明一族の参陣を待って

いた。これと合流のうえ、大庭景親の軍勢との戦いにのぞみたいと考えていた。しかし、いつこうに到着しないのにしびれをきらした頼朝は、八月二〇日、実平父子や中村一族、北条時政ら四六人の武士とその郎党を率いて、伊豆国を出、相模国土肥郷に入った。いうまでもなく、実平の本拠地である（以下、『資料編』古代・中世 No. 7 22 参照）。



49

東祐親は三〇〇騎を率いて頼朝の背後の山に陣をとった。

このとき、頼朝が待ちに待っていた三浦勢はようやく丸子川（酒匂川）の辺に到着し、平氏方の領地に放火してまわっていた。煙のあがるのを三浦勢の所行と見てとった景親は、すでに夕暮れどきであったにもかかわらず、今日のうちに合戦を遂げることを提案した。明日に延ばせば、三浦勢が頼朝方に加わり、めんどうになると考えたからである。皆がこれに賛同して、ただちに攻撃を開始した。

頼朝勢は折からの暴風雨の中、一〇倍もの大庭勢に勇敢に立ち向かい、死を恐れず戦ったが、佐奈田与一義忠とその郎従豊三家康、武藤三郎らが討たれた。大庭勢はこれに乗じてさらに攻勢となり、頼朝を追いつめた。二四日の暁を迎えるころ、終夜の戦いに疲れはてた頼朝勢は、後背の相山<sup>すまやま</sup>山中に退くほかはなかった。このとき、大庭勢の中にあつてひそかに頼朝に心を寄せていた飯田家義という者が、景親の追撃を妨げて、頼朝の逃走を助けた。

頼朝は相山の内の堀口というあたりまで退き、そこにふみとどまって態勢を整えようとした。しかし、勝に乗り、押しに押して、一挙に頼朝勢を粉碎してしまおうと意気込む景親勢は、たちまちそこに迫ってきた。頼朝はさらに後の峰に逃れる。加藤次景廉、大見実政らが景親勢の前に立ちはだかり、矢を射て応戦。頼朝もまた「百発百中の芸を振」るって矢を射たのち深山に退却した。この間戦死する者多く、また多くの乗馬も矢玉をうけて射殺された。こうして頼朝勢は山の奥へ奥へと追ひこまれていった。

そこで、頼朝は倒れた木の上に立ち、そのかたわらに実平がつき従って、味方の者が馳せ集まってくるのを待った。そして、実平はいった。この人数が全部頼朝と行動をともしては敵に見つかってしまう、頼朝の身は、たとえどんなに時間がかかっても、自分が「計略を加え、隠してまつる」から、その他の人々はそれぞれに分

散してここから脱し、再起を期すはかない、と。誰もが頼朝のお供をしたいと願ひ、頼朝もまたそれを許そうとする気配であったが、この分別ある言葉に反論できる者はなく、皆が泣く泣く別れていった。北条時政・義時父子は甲斐源氏の助勢を乞うべく甲斐をめざして箱根湯坂道をたどった。時政の子宗時は土肥山から桑原へ降りたのち早川辺で伊東祐親の軍勢に射殺された。年老いた工藤介茂光は歩行困難となり、みづから命を絶った。

頼朝・実平らが身をひそめているとき、景親は頼朝のあとを追って峰や谷を捜し求めた。そのとき、梶原平三景時は、「たしかに御在所を知るといへども、有情の慮おもひやりを存じ、この山には人跡なしと称して、景親の手を曳ひきてかたわらの峰に登」った。『吾妻鏡』の表現はすこぶる簡単である。その間、頼朝が髻もとどりの中から正観音像を取り出して「ある巖窟」に安置したので、実平がそのわけを尋ねると、景親に首を取られたときに髻の中に正観音があつては、源氏の大将軍のやることではないと人々に誘そられるであらうから、と答えた。もはや最期と覚悟したのであらう。

さて、こここのところの『吾妻鏡』の描写をもう一度整理しておこう。後の峰に逃げた頼朝は「臥木ふしき」の上に立つて、時政らが退却してくるのを待ち、そして別れた。景親が追ってきたが梶原景時がわざと見逃した、と述べた次に、「この間、武衛、御髻の中の正観音像を取りて、ある巖窟に安んじたまつらる」とあり、このときはじめて「巖窟」が出てくるのである。景親がやってきたときに巖窟の中に身を隠していたとは書いてない。また、「ある巖窟」に隠れていて、そこで正観音像を出して安置したという書き方にもなっていない。巖窟は単に像を安置した場所として書かれているのである。

岩・真鶴から 乗船  
その夜、北条時政が頼朝のもとにもどってきた。箱根山別当行実が頼朝の安否を心配して弟の僧永実えいじつに食糧を持たせて差し向けたのに途中で出会い、これを伴って来たのである。空腹をかかえ

ていた一行はおおいに喜んだ。実平は、世の中が平和になったら永実を箱根山別当に任じようという、頼朝も同意した。一行は永実に導かれてひそかに箱根権現に赴き、永実の宅に入った。救いの手をさしのべた箱根山別当行実は、父良尋の代から頼朝の祖父為義や父義朝と親交があったことから、北条にいた頼朝のために祈禱もし、石橋山で頼朝が敗北したとの報を聞いて一人愁嘆にくれていたのであった。

一方、三浦勢は二三日夜から丸子川の辺で夜が明けるのを待ち、頼朝のもとに参陣しようとしたが、すでに合戦に敗北したと聞いて、しかたなくひき返した。帰路、由比ヶ浜で平家方の畠山重忠勢と合戦となったが、これを退けて衣笠城に帰った。

八月二五日、景親は四方八方に軍兵を派遣して頼朝らの逃げ道をふさいだ。頼朝らは袋の鼠同然となって箱根山に隠れていたが、行実の弟で故山木兼隆の祈禱師であった智蔵房良暹りようせんという者が軍兵を集めて頼朝を襲撃しようとした。これを聞いた永実は、山中のことにくわしい案内者をつれ、実平とともに一行を先導して、箱根道を經て土肥郷へ無事に送り届けた。

二七日、北条時政、同義時と岡崎義実、近藤七国平らは「土肥郷岩浦より船に乘らしめて、また房州を指して纜とづなを解といた。かれらはまもなく海上で三浦勢の船と出合い、ともに安房に向かった。三浦勢は二六日から畠山重忠率いる大軍に衣笠城をはげしく攻めたてられていた。落城必至となったとき、八九歳の義明は「吾、源家累代の家人として、さいわいにしてその貴種再興の秋ときに逢うなり。……今、老命を武衛に投じ、子孫の勳力を募らんと欲す」といって、義澄や和田義盛らを城から脱出させ、みずからは城にふみとどまって、二七日ついに壮烈な最期をとげたのである。

二八日、頼朝一行は「土肥真名鶴崎より船に乗り、安房国の方に赴さだつねいた。実平が「土肥の住人貞恒に仰せて



小舟」を準備させたのであった。そして二九日安房国平北郡狹嶋に着岸した。一日早く船出して安否を気づかっていた北条時政らがこれを出迎え、安堵の胸をなでおろした。

一方、実平の嫡子遠平は、二八日に一行と別れ、この間の事情を政子に報告するという使者の大任を仰せつかった。政子は伊豆山から秋戸郷（場所不詳）に移っていたため、安否がまったくわからず、一人悲しみにくれているところに、九月二日になってようやく遠平が参着したのである。それまでのいきさつをくわしく聞いて無事喜びとともに、真鶴崎から乗船後の様子がわからなくて、また悲しむというありさまであった。

以上が、『吾妻鏡』によって知ることができる石橋山の合戦の経過である。同書は幕府が編纂したものであるが、合戦から一〇〇年近くも、あるいはそれ以上もたつてからの編纂である。だから、当時を知る人もなく、合戦の史実を伝えているとはいえない。さまざまな伝承や古文書、公家の日記、『平家物語』などの文学作品も使って書かれている。北条氏が幕府の実権を握った後に書かれたから、北条氏を特別扱いする記述となっているのも特徴である。そうした限界をもちながらも、いわゆる文学作品ほどには虚構・創作でおもしろおかしくしようとは考えていないから、まずはこの本で経過をおさえるのがよいと思う。そうして見ると、改めて、実平の果たした役割の大きさ、頼朝との人間的なつながりや信頼関係の強さがうかがいあがってくる。

### 第三節 梶山と礪の岩屋

『平家物語』と 石橋山の合戦から真鶴での乗船までをくわしく書いた文学作品に『平家物語』と『源平盛衰記』がある。それらには、この間の経過が『吾妻鏡』とはかなり異なって描かれているので、対比

させながら見ていき、相山やとくに真鶴町に関係深い鵜の岩屋がどのような位置関係で描かれているかに注意してみよう。

『平家物語』は、現在伝わるたくさんの種類の本の間に、内容のちがいが見られる。それらのもとになる原形の本の成立は、平家が滅んでそれほど経っていない鎌倉時代前半期とみられているから、原形本は『吾妻鏡』よりも早くできたことになる。しかし、今伝えられている本はその後に成立したものであるから、そこに書かれていることをそのまま真実とみることはできない。また、そもそも「物語」であるから、人々におもしろく聞かせるための工夫や脚色がはじめからあったし、後にはより多く付け加えられたであろう。

こうした特徴は、『源平盛衰記』の方により多く見られる。『源平盛衰記』はもともと『平家物語』の一種とみなしてもよい物語であったが、インド・中国・日本の故事・説話を各所に挿入するなど、脚色がいつそう進み、史実に留意するよりも物語としてのおもしろさに力点がおかれた作品となっている。こうした点に注意する必要がある。

すぎのまろふ  
しのうつろ

『平家物語』を見よう。八月二四日の午前八時前後に頼朝方が、山の上に向かって引き退き、相山に入った。そこで頼朝は「峰にのぼりて、伏木のありけるに腰うちかけて」味方がやってくるのを待った。そこで、頼朝が、多勢ではあぶないので分散するよう命じたことになっている。頼朝と行動をとにしたのは実平・遠平父子、実平の甥「しんかいのあら次郎」、土屋三郎（宗遠）、岡崎四郎（義実）という侍五人と、実平の従者「小とねりおとこ七郎丸」とある。すべて、実平とその子弟・一族、従者となっている。『吾妻鏡』のこの部分には実平以外の名はないが、岩からの船出の記事などから、実平の子遠平、岡崎義実、近藤七国平がいっしょにいたようである。

頼朝一行は「かのすき(杉)のまろふしのうつろの中に七人入こもり給ひぬ」とあるから、先に頼朝が腰かけていた杉の倒木の空洞に隠れたのである。そこへ景親の一行がやってきて、頼朝らの足跡がそこで消えてしまっているの不思議がる。景親が「むちをもてふし木をうちたゝけば、中、大(おお)にうつろなり。これはいかに。此木(この)はまはりおほきなり。此うつろには人こもるとも十廿人もこもらんずるものを、もし此中にもやあるらん。入てさかせや」と命じた。そこで梶原景時が穴をのぞいて中にひそむ一行を見つけたが、これを見逃すために「ふし木の中に入」り、穴の入り口にたちふさがって他人を入れず、「弓矢むちをもて、からり／＼とさがしめぐる」ふりをした。

『平家物語』では、隠れたのは巖窟でなく、巨大な杉の倒木の幹の空洞となっている。景親の目には、一〇人も二〇人も隠れることができるような巨大な木に見えたという。景時も、空洞の中に弓矢をもって入り、それをふり回して、捜すふりをしたという。スリリングな場面で、これだけ誇張していわれれば、かえって六、七人が入れるくらいの大木があったかもしれないと、聞く人を納得させることができたのであろうか。

#### 鴉の岩屋と云谷

『源平盛衰記』では、頼朝は「土肥相山(狭)を守て、かきわけ／＼落」ちたが、「杉山分内(狭)せはき所にて、忍びかくるべきやうなし」と、「土肥相山」は狭く、隠れる場所がない所として描かれている。そこで、頼朝を逃がすため、田代信綱が高い木の上に登って矢を射ている間に、頼朝は「鴉の岩屋と云谷(いづ)におりくんだり、見まはせハ、七八人が程入ぬべき大なる臥木あり」となって、そこでしばらく休んだ、という。そこに味方の者どもがたくさん集ってきたので、頼朝が、分散して逃げるよう命じたことになっている。

頼朝と行動をとにしたのは『平家物語』に記された侍五人と、安達藤九郎盛長となっており、実平の従者にかわって盛長の名があげられている。盛長は乳母の比企尼の娘婿で、流人時代からの頼朝の側近である。かれら

は「臥木のうつほにかくれ入にけり」となった。そこに大庭軍がやってきて、景時がうつほに入って見逃す場面が、さきの『平家物語』よりもさらに手のこんだ内容となって描かれる。

ここでも、頼朝一行が隠れたのは伏木のうつほ（うつお〓空・うつろに同じ。空洞）である。ただ、その伏木のあった場所が、『平家物語』では相山の峰であるのに対し、『源平盛衰記』では杉山から降り下った「鵜の岩屋」という谷であるところが、大きく異なっている。また、「鵜の岩屋」の名が後者ではじめて出てくる点が注目されるが、「鵜の岩屋」は谷の名であって、岩屋の中に身を隠したとは書いてないのである。

「鵜の岩屋」の位置関係について知るために、もう少し『源平盛衰記』を見ていこう。景時らは、その伏木のところから「土肥のまな鶴を見やれハ、武者七八騎ミえたり」とあり、真鶴からある程度離れているが、真鶴を見ることができ、しかも景親はその武者が頼朝一行ではないと判断している。「鵜の岩屋」はそのような場所として設定されている。

その後、「伏木を出て、小道越と云巖石をのぼり、土肥のまな鶴へ向て落行けり」、「小道のたうげ（峠）にのぼ」と、後から敵が追いついてきたので、「たかき所に上てみまはせハ、傍（かたわら）に御堂有（あり）。小道の地藏堂と云寺也」、そこで一行はその堂に隠れて、敵の追及を逃れた。それから一行は堂を出て落ちてゆき、杉山に隠れた。景親は三千余騎で杉山をとり囲み、数日間さがしまわったが、ついに見つけ出すことができず、引き揚げた。頼朝らが五、六日を山中で隠れすごす間、実平の女房が僧にもたせて食糧や水をさし入れ、地藏堂の僧もおとずれたという。

以上の記述からは、伏木のある「鵜の岩屋」から真鶴に出る途中に、まず小道峠に登り、その近くに地藏堂があったことになる。すなわち、「鵜の岩屋」は真鶴から見て、小道の地藏堂のある山の奥の方に位置するものとして描かれていることになる。もちろん、これはあくまでも物語の世界の話である。しかも「鵜の岩屋」も小道

の地蔵堂も、『吾妻鏡』や『平家物語』には出てこないから、『源平盛衰記』ではじめてつけ加えられたのであろう。この物語の成立にかかわった人が土肥や真鶴の現地をある程度知っていたのではないかと思われる。

小浦と真鶴

岩が崎

『平家物語』では、杉の伏木のうつろから出た頼朝一行は、「とひのかぢ屋が入といふ山にこもりて」景親の追及を逃れたという。その山の峰からは、伊東祐親が土肥に押しよせて実平の家の資材を差押え、家を焼払うのが見えた。また、土肥に三つの光があるのを見た実平は、みんなの気持ちを引き立てようとして、第一の光は八幡大菩薩が頼朝を守ってくれる光、次の光は頼朝が繁昌して一天四海を輝かすという光、第三の光は実平が頼朝の御恩をうけて放光する光、と歌い、舞をまっただという。この話は大同小異で『源平盛衰記』にも「土肥焼亡の舞」として載っている。なお、町内の岩にある「謡坂」という坂の名はこの歌舞にちなんでつけられたものといわれている。

そこに実平の妻から、三浦の人々が安房国へ渡ったという知らせが届けられた。実平の提案で、さっそく「今夜中に海船をめして、あはのくにへおち給ひて」再起を期そうということになり、「小浦といふ所へいで給ひて、船一艘にのりてあはの国へぞをもむき給」うた。そのさい、頼朝らが烏帽子（頭）をつけず、落武者の様相だったので、「その浦に次郎大夫とてありけるもの、かひ／＼しく烏帽子（実平）十かしら」を用意して喜ばれたという。

『源平盛衰記』も同じような話を載せているが、大きくちがう点は、「土肥二郎（実平）ハ、出富（とみ）の小検校（こけんぎょう）と云海人（あま）が小船をかり、真鶴岩が崎と云所より、いそぎ舟を出さんとし」た、というところである。『平家物語』では単なる「小浦」としか記していないが、ここでは真鶴の岩が崎と、はっきり地名が記してある。

また、『源平盛衰記』では、「漕（こ）や、いそげとて、安房国洲崎を心ざして落行ける程に、沖中にして俄（にわか）に風起り、波立て、いづこともしらずくらき闇（やみ）に、渚に舟をぞ吹付たる」とあり、途中で相模の早河尻に吹き寄せられ

てしまったという。そこではちょうど大庭軍がかがり火をたき酒もりをしているところであったが、こともあらうに実平は、「此辺ハ家人ならぬ者なし」と敵陣にいつて酒肴を集めて船に運び、飢うまをやすめて船出し、洲崎へ着いたという。

この話もまた、『吾妻鏡』『平家物語』にはなく、あとからつけ加えられたものであろう。ただし、岩と早川の間は当時船で往来があったこと、早川の辺が実平・遠平の所領であったことをよく知っている者の「しわざ」である。

『平家物語』は安房の着船地を「あはの北方にりう嶋」としているから、『吾妻鏡』の狐島と同じである。それらより成立がおくれる『義経記』は、『源平盛衰記』と同じく「安房国洲の崎」に着いたとしているが、乗船地を「伊豆国真名鶴崎」とし、「三浦を志して押出す」が、風がはげしかったため三浦半島に船を寄せることができず、洲の崎に着いたとしている点が、異なっている。このようにさまざまな脚色くさしきが加えられることは、真鶴・岩の港と、早川、三浦半島、房総半島との間に船の往来が日常的にあったことを示しているのである。

#### 第四節 郷土の伝承

創作としての  
「鳴の岩屋」

頼朝が二三日夜の石橋山の合戦に敗れて、岩・真鶴から船出するまでの間、大庭軍の追及をかわし命脈を保ち得たのは奇跡といってもよいほどである。それを可能としたのは第一に土肥実平の功績である。出陣、潜伏、船出のすべてが実平の領地でなされた。実平あるいはその従者、箱根権現にかかわりのある人々が、石橋山から土肥の梶山、そして箱根山にいたる山中を知りつくしていたからこそできたので

ある。

『平家物語』『源平盛衰記』には、岩・真鶴からの船出の日を記していないが、『吾妻鏡』では八月二八日としている。これを事実とすれば、二四日早朝から九四日間も敗者として身をひそめていたことになるが、『平家物語』『源平盛衰記』ではこの間山中にこもっていたことになっている。ところが、『吾妻鏡』では二四日夜に箱根山に入り、二五日には箱根道を通って土肥郷に赴いたと記すのみで、土肥郷のどこに行ったのか、二八日までの間どこにいたのかについてはまったく書いてない。少なくとも二、三日間は土肥郷やその近辺は大庭軍か伊東軍の監視下に置かれていたにちがいないから、実平の館や城に入れるはずはない。『吾妻鏡』の記述にはこうした疑問が残る。『吾妻鏡』は多くの資料を調べて史実を記録しようと努めていたが、実際にそれが編纂された鎌倉後期か末期には、二五日から二八日までの隠れ場所のみならず、石橋山の合戦時の史実が全体として明確には伝承されていなかったであろう。ただし、頼朝の乗船地が岩あるいは真鶴であるということは、はっきりといわれていたと思われる。土肥郷から安房に向かうとすれば、岩・真鶴の方が吉浜などより良い乗船地であることは疑いないから、この伝承はまちがいないであろう。町内岩の海岸には頼朝船出の地を示す石碑がある。

このように、石橋山の合戦についてはほぼ確かなことといえるのは、ほんのわずかな点だけである。四日間の本当の隠れ場所は、箱根山から石橋山・土肥郷の海岸部にかけての地域内である、という以上に確かなことをいうことは、今となってはもはやできないことである。本当にどこに隠れていたかをこと細かく記録したものは後世に伝わらなかったし、もともと、その当時もそのようなものは作られなかったであろう。史実の伝承もなかった。じきに忘れられ、長い間忘れられたままであったのである。

先にも述べたように、『源平盛衰記』の内容は具体的に、現地の様子をふまえて書かれている。しかし、それ

は史実を述べたものではなく、あくまでも、現地をふまえた上で作られた創作なのである。「鵜の岩屋」や「小道の地藏堂」が現地のどこにあるか、あるいはあったかということが、これまでも問題になってきたし、今も本当のところはわかっていない。それを確かめることは興味あることであるが、たとえその場所を確定したとしても、それはあくまで、『源平盛衰記』という物語の中にある「鵜の岩屋」と「小道の地藏堂」の場所を確定したということである。頼朝が実際に隠れた場所がわかったということではないのである。このことはきちんとおさえておく必要がある。

『源平盛衰記』には、実平が歌い舞ったという「土肥焼亡の舞」の歌詞が、『平家物語』よりも多く記されている。その中に「うれしや水、鳴は瀧の水」「万歳楽」などの詞がある。中野敬次郎氏は『石橋山合戦前後』（小田原文庫3 名著出版 一九七六年）という本の中で、それらが山伏らの行なった、めでたい延年舞の歌詞と同じであること、箱根権現や三島明神で鎌倉時代に延年舞が行なわれており、この二社は伊豆山と並んで山伏の根拠地であることを指摘されている。

先にも述べたように、『源平盛衰記』は他の本よりも山中の記述が具体的に、現地をふまえた内容になっている。これも、この地域で活動した山伏の知見がとり入れられていると考えれば納得がいく。実平が山伏のような活動をして山の中をよく知っていたとか、実平が延年舞を舞えたとかいうことではない。山伏たちの知識や活動が物語のさまざまな場面や人の描写にとり入れられたのである。

#### 頼朝会の「発見」

一九三〇年（昭和五）は石橋山の合戦からちょうど七五〇年にあたった。それを記念して、有志の人々が頼朝会を結成し、頼朝の業績を顕彰しようということになった。それにともない、石橋山の合戦場から、逃走した経路や隠れた場所をたずね歩いて遺跡をさがし出し、これをも「顕彰」しようと



いうことになった。

こうして同年一〇月五日に山に分け入った頼朝会の人々は、湯河原町鍛冶屋九五三番地の通称「桜郷」という場所で見、これこそ「鵲の岩屋」ではないかと考えたのであった。そして、その後、『吾妻鏡』の「ある巖窟」、「源平盛衰記」の「鵲の岩屋」はその位置などからみて、ここにちがいないという説が主流となり、一九五五年（昭和三〇）一月一日に神奈川県が、「土肥相模山巖窟」という名称で史跡に指定した。

この岩穴の存在自体は地元の人たちも知っており、その中に石で刻まれた三三体の観音像が安置されているところから「三三体観世音」の岩屋と呼ばれていた。山伏などの修行者がいた信仰の場であったにちがいない。しかし、地元の人には旧来ここを「しとどの岩屋」と呼んではいなかったし、頼朝が隠れた場所であるという伝承もまったくなかった。頼朝会が遺跡顕彰の目的で「鵲の岩屋」として「発見」し、そうして史跡になってしまったのである。

頼朝会の人々はまた、湯河原町吉浜の奥、星ヶ山の山ふところに「寺屋敷」という地名があることを聞いて調べた。茅の生いしげった標高六〇〇メートル余のところに、わずかに平場があつて七間四方に礎石が残っていた。そのあたりからは真鶴岬がよく見おろせる。会の人々は、これが小道の地蔵堂にちがいないと考えたのである。今、そこにもりっぱな石碑がある。

江戸幕府が幕末の一八三〇年（天保元）から四一年にかけて編集した『新編相模国風土記稿』には、相模国の地理や歴史が村ごとにくわしく記されている。その土肥吉浜村の項には村の南、海岸のそばに地蔵堂があり、それが頼朝主従八人が「小道地蔵堂に匿れ、其厄を免られし所」の地蔵堂であると記している。当時、境内に一七六五年（明和二）建立の碑があり、その碑文も引用されている。それによると、この堂の僧純海が頼朝をかくま

ったので、後に頼朝が「田五千頃」を寄進して小道山頼朝寺というりっぱな寺を建立させたが、一二六五年（文永二）に火災で焼失し、田も海潮に浸食されてなくなったという。この幕末の段階で、頼朝のころには堂が山中にあったと伝えてはいるものの、そのときの所在地がどこかはすでに村人にもわからなくなっていた。

だから、「寺屋敷」という地名のところが「小道の地藏堂」の跡地だという伝承は、地元にはなかったのである。ただし、明和二年かそれ以前から、村の地藏堂が頼朝ゆかりの地藏堂の後身だというふうに村人自身がいい伝えていたことはまちがいない。「寺屋敷」という地名のところに礎石をもつ建物があったい、いつからいつまであったか、というようなこともわからないままに、そこを「小道の地藏堂」にしたのは地元の人ではなかったが、いまやそれが地元でも確かなことのように受けいれられてしまっている。

#### 真鶴の鴟の岩屋

『新編相模国風土記稿』が湯河原町鍛冶屋の奥の岩穴について何も記していないのに対し、真鶴村の項では「鴟窟」を真鶴の「港内海涯にあり」と記している。幕府が作らせた正保の国絵図にも載っているという。そして、

窟の闊凡一丈、深六間許古は深七十間許ありしに往々怒浪の為に潰しと云、治承の昔、頼朝石橋山の合戦に敗走し、大庭三郎景親等が為に逼られ、

主従七騎にて潜れし所なり、按ずるに、「東鑑」に或る岩窟と記せるは即是なるへし

と記す。当時は幅約三メートル、奥行約一一メートルほどの岩穴であったことがわかり、また、昔は奥行がその一〇倍以上であったが、浪に浸食されて小さくなったといっている。幕末では、「鴟の岩屋」の伝承地はここだけであった。

そして、そこが「鴟の岩屋」であるとする伝承は、それより三〇〇年ほど前の戦国時代にはすでにあったのである。それは、連歌師谷宗牧が一五四五年（天文一四）二月一四日にそこを訪れたと、『東国紀行』という紀

行文の中に記しているからまちがいない（『資料編』古代・中世 No. 30）。前の年の九月下旬に京都を発ち、関東に向けて旅してきた宗牧は、その旅の様子を日記風にくわしく書きとめている。

二月一四日に熱海を出発した宗牧一行は走湯山に詣でたあと、真鶴に入った。石上氏という真鶴の代官が宗牧一行を迎えにきてくれたので、これと同道した。

とひの浦近くなれば、杉山の城ふりさけ見つゝ、真鶴が崎、石上しる所にて、さきに人遣し、船遊びのまうけしつゝ、しとどの岩屋みせ侍り。此の岩屋は、杉山の合戦に打ち負け給ひて、頼朝かくれおはしけるを、梶原平三見付けてたすけ参らせし、此の忠節によりて、無比類近習になれるよし、東鑑にみえたりなど、人のかたりし。さもあるにや。大庭千世に、

蟹小舟さほのとり／＼みつるかな

しとどの岩やまな鶴が崎

などいひつゝさし寄せて、小庵におりたり。いろ／＼手づからとりくひつゝ数盃。

このように、伊豆山を出てから、真鶴に行く途中で、頼朝が敗走した「杉山の城」を遠くにふり仰いで見つつ、真鶴に入っている。代官が船遊びの準備をしてくれて、船で「しとどの岩屋」を見物している。そのさい、この岩屋が、頼朝が杉山で敗北したあと隠れた岩屋であり、そこにいたのを梶原景時が見つけたが助けたために、あとで景



真鶴の鶴の岩屋

時が頼朝の比類ない近習になったということが、『東鑑』に書いてあるなどと、そこにいた人が宗教に説明したものである。

江戸時代前期ころ書かれたとされる『北条記』（『小田原記』とも）にも、小田原城主の北条氏綱（一五四一年没）が伊豆山参詣の帰りに真鶴にたち寄ったという話を載せている（『資料編』古代・中世No.29）。

真名鶴か崎と云所に、鵜シロか巖谷と号して大成石穴あり。是は昔頼朝卿、石橋の軍に負て籠り給て、運を開給ひし所也、此所御見物有て、浦人とも被召、鵜（鵜）を取せて、かつきをせさせて御酒宴あり。

とある。これは後に記されたものだから、氏綱が実際に来て見たかどうかはわからないが、可能性は十分ある。真鶴の岩穴を「鵜の岩屋」とする伝承が、戦国時代以前のいつごろ作られたものかはわからない。しかし、戦国時代には確かに地元でそのように伝承され、石上のような北条氏の家臣にも信じられていたことはまちがいない。もちろん、それだからといってその岩穴が『源平盛衰記』に記された「鵜の岩屋」であるということにはならないし、頼朝が実際に隠れたということにもならない。

ところで、頼朝らが逃げ隠れていた四〇五日の間、誰かが食べ物を差し入れていたにちがいない。山中の案内や船の準備などをする者もいたはずで、『吾妻鏡』の記すように、箱根権現の僧あるいは山伏がこれにかかわった可能性は高い。『吾妻鏡』や『源平盛衰記』には船を準備した人の名が、「土肥の住人貞恒」とか、「出富の小検校」と具体的に記されているが、その人の子孫が誰であるかという伝承はなかった。

他方真鶴村の青木、五味、御守の三旧家は、真鶴の岩屋に隠れた頼朝らに食事を運んだりしたため、その功によって、頼朝からそれぞれに名字を与えられたと伝え、これを「真鶴の三名字と申」ということが、一八三三年（天保四）書写の「伊豆名跡志」（『資料編』近世No.153）に載っている。

名主の五味伊右衛門演貞<sup>のぶさだ</sup>は、岩屋の整備にとくに熱心で、岩屋の内の苔を除いたり、修理を加えて、一六四〇年（寛永一七）に弁才天を安置した。また、太兵衛が如意輪観音を、即往道心が釈迦如来を建立し、村中が石の垣を立てている。一六四五年（正保二）には僧蔭山が鴉窟縁起と頼朝の絵像を窟の内の岩に刻んで、頼朝の忍居した場所であることを明記し、あわせて五味氏の功績をたたえている。同じとき、僧風外も同じような縁起を記している。江戸時代初期に、名主が音頭をとり、他の村人や僧も加わって史跡としての整備が行なわれているのである（『資料編』近世 No. 146・147）。